

# 2年2組 国語科学習指導案

場 所 2年2組教室

- 1 単元名 気持ちを読みとり，音読げきをしよう
- 2 教材名 お手紙（アーノルド＝ローベル）・「ふたりは」シリーズ
- 3 単元のねらい
  - 【関心・意欲・態度】
  - ・手がかりとなる本文表現を抜き出したりするなど，がまくんとかえるくんの気持ちを進んで読み取ろうとしている。
  - ・進んで音読の工夫をしたり，楽しんで音読劇をしたり見たりしている。
  - 【読むこと】
  - ・がまくんとかえるくんの気持ちを，台詞や行動描写，地の文などに着目して読み取ることができる。
  - ・読み取った気持ちが表れるように，声の大小，速さ，間の取り方，表情や身振り，登場人物の目線・姿勢等に気を付けて音読したり，簡単な劇を楽しく演じたりすることができる。
- 4 単元における主な言語活動 小学校学習指導要領解説 国語編 p42より

「読むこと」の言語活動例のイ  
 物語の読み聞かせを聞いたり，物語を演じたりする言語活動  
 物語を読み聞かせてもらったり，それらを簡単な劇にしたりして楽しむ言語活動である。

物語の優れた読み聞かせは，語り手の声そのもの，声の大小，速さ，間の取り方，表情などに触れて，文字などの抵抗なしに文学作品の世界に浸ることができる。読み聞かせによって本や文章を音読する楽しさを知り，自分でも読み聞かせや，身振りを伴った簡単な劇活動を行いたいと思うようになる。このような気持ちを大切にして，役割を決めて読んだり，友達と協力して人形劇，音読劇，紙芝居などの簡単な劇を演じたりする活動へとつないでいく。

- 5 本単元のねらいに関わる学級の児童の実態
  - (1)関心・意欲・態度（：できている：課題である）  
 紙芝居を見ることや短い絵本の読み聞かせを聞くことは好きな児童が多い。  
 1学期の単元「本と友だちになろう」では，お面を付けて音読発表会を行った。その際，自分から身振りを入れて音読発表をする児童がいた。
  - (2)読むこと（：できている：課題である）  
 1学期の「ふきのとう」の学習で，多くの児童が登場人物の様子を思い浮かべて音読した。  
 1学期の単元「本と友だちになろう」では，場面の様子や登場人物の台詞をもとに，「加え読み」（前後の文脈を踏まえた上で，新たに台詞を加えて音読すること）ができた。  
 本文を覚えることに精一杯になるため，声の大小や表情等の工夫が十分ではない。
- 6 研究テーマに関わって
  - (1)学習のユニバーサルデザイン化  
 各場面の挿絵の活用及び登場人物のお面などの活用
    - ・登場人物の動作や表情，場面の状況を把握するため，教科書の挿絵を拡大し，掲示する。
    - ・担当した登場人物のお面や上着などの小道具を身に付けることで，役になりきったり登場したときの気持ちに共感したりする手助けとする。
    - ・「1時間の授業の流れ」の掲示物を黒板に掲示し，授業の流れを見通せるようにする。
  - (2)協同的に学び合う学習集団の育成  
 ペア班交流の位置付け
    - ・2つの班がペアを組み，交流する場を位置付ける。各班での音読練習後，ペア班で互いに

発表練習を見合うことで、音読の工夫やよさを学び合えるようにする。

「かんそうの言い方 ーらんひょう」の掲示

- ・ペア班や担当班の音読劇の発表を見た後に感想を発表する。その際に多様な感想が出るように、「次は自分もやってみたいと思いました。」など、感想の例を一覧にした「かんそうの言い方 ーらんひょう」を掲示する。

### (3) 言語活動の充実を目指した単元指導計画の在り方

指導事項及び言語活動を系統的・発展的に配置した年間指導計画（年間）

- ・1学期は、登場人物の気持ちになって台詞の部分工夫して音読した。本単元では、「加え読み」を入れて簡単な身体表現も入れた音読をする。3学期は、自分が一番好きなどころを選んで音読・劇発表ができるようにする。

第3次を中心とした言語活動の充実（各単元）

- ・本単元で行う言語活動は、音読劇である。グループごとに劇にしたい場面を担当し、グループ内で役割を決め、仲間と協力して音読劇を作り上げる。音読の際には、熟考・評価型の読解である「加え読み」を実施する。「加え読み」とは、「前後の文脈を踏まえた上で、新たに台詞を加えて音読すること」である。教材「お手紙」には、登場人物の台詞が多く出てくる。台詞の前後で、創造的な読みである「加え読み」をすることで、楽しみながら児童が自分の考えをもつことができる。また、自分なりに「加え読み」をすることができたとき、劇を演じる楽しさも増すと考える。

習得・活用のサイクルを生み出す系統的、発展的な単元構成（各単元）

- ・本単元構想のポイントは、「第3次の音読劇につながるように、第2次の授業をどのように構築するのか」という点である。「第2次の場面読み」と「第3次の音読劇」が分離してしまわないよう、習得・活用のサイクルを生み出すことが大切である。
- ・そこで、第2次では、従来の場面読み（登場人物の気持ちの読み取り）をした上で、授業過程の「深める」過程において、「音読の仕方を工夫し、音読練習をする場」を位置付けた。「音読練習の場」を位置付けたことで、「第2次で音読の仕方を習得し、第3次の音読劇で活用する」というサイクルを生み出そうとした。
- ・音読の視点は「声の強弱（口の動き）・読む速さ・間の取り方など」、動作を取り入れる際の視点は「顔の向きや傾き・手足の動き・視点（立ち座りなど、どの位置にいるのか）」などである。これらの視点は、児童の姿の中にすでに見られるものである。児童が音読練習をする中で、モデルとなる児童を教師が取り上げて価値付け、視点を一覧化する。

### (4) 協同的な学び合いを通して、読みや表現を深める授業の在り方

児童が見通しと願いをもち、学習を振り返る場の設定

- ・「1時間の授業の流れ」の掲示物を板書に掲示し、児童が流れを見通せるようにする。また、授業の終末で、全員が挙手で本時のめあてを振り返る場を設定する。
- ・授業の導入で、音読の仕方や身振りの仕方を示した「げき名人ひょう」を手がかりに自分のめあてを決める。例えば「がまくんが『ばからしいこと、言うなよ』と言う所を、少しおこってすねたように、口をとがらせて音読します。」のように、自分のめあてを決める。その後、ペアで評価し合う場を設定する。

言語活動の充実を目指した工夫改善

- ・役になりきった音読や身振りになるよう、お面や身に付ける小道具を用意する。
- ・「げき名人ひょう」を黒板に掲示し、児童には「げき名人カード」を配る。班での練習やめあての振り返りの場で相互評価できるようにする。

協同的な学び合いを生み出す指導・援助の工夫

- ・音読劇の向上のため、「ペア班による相互評価」を導入した。ペア班で「個人で決めためあてに沿って表現できたか」「自分にはない工夫やよさがあつたか」を相互評価する。
- ・担当班が劇発表をする前に、「モデル班による発表を見る場」を位置付けることで、新たな視点（台詞の裏にある気持ちを上手に表現している児童）に気付けるようにする。

### (5) 他の活動との関連

音読劇発表会の実施

- ・1・2年合同集会の場で、1年生に向けて「お手紙」の音読劇発表会を実施する。

## 7 単元指導計画（全11時間）

時間	主な学習活動	指導・援助
1 ・ 2	本時の課題を確認する。 「ふたりは」シリーズの読み聞かせを聞いて かんそうを はっぴょうしよう。 「ふたりは」シリーズの読み聞かせを聞く。 範読を聞いた後、感想を全体交流する。	教室にアーノルド＝ローベル・コーナーを設置し、並行読書ができるようにする。教師が、声の大小・速さ・間の取り方などの音読のモデルを示す。各自が「お手紙」の感想をもてるよう、プリントに記入した後に全体交流する。
3	本時の課題を確認する。 いちども お手紙をもらえない がまくんの気持ちを読み取り、音読しよう。 一斉音読後、がまくんの気持ちを読み取る。 音読の個人練習をしたあと、ペア交流をする。	自身の経験をもとに、どんな気分かを発表した児童がいたら、価値付ける。音読の工夫の仕方が分かるよう、「音読名人カード」を用いる。ペア交流の際、聞き手の児童にも視点をもたせるため、評価カードを用いる。
4	本時の課題を確認する。 がまくんに 手紙を書いた かえるくんの気持ちを読み取り、音読しよう。 一斉音読後、かえるくんの気持ちを読み取る。 音読の個人練習をした後、ペア交流をする。	「しなくちゃいけないこと」「大いそぎで」「とび出しました」の言葉をもとに、動作を付けて、「加え読み」につなげる。音読の工夫の仕方が分かるよう、「音読名人カード」を用いる。ペア交流の際、聞き手の児童にも視点をもたせるため、評価カードを用いる。
5	本時の課題を確認する。 お手紙をまつのが あきあきした がまくんの気持ちを読み取り、音読しよう。 一斉音読後、がまくんの気持ちを読み取る。 音読の個人練習をした後、ペア交流をする。	本文の対話から、すねて諦めたがまくんの様子や一生懸命説得するかえるくんの様子を読み取り、「加え読み」につなげる。音読の工夫の仕方が分かるよう、「音読名人カード」を用いる。ペア交流の際、聞き手の児童にも視点をもたせるため、評価カードを用いる。
6	本時の課題を確認する。 お手紙のないようを知ったときの がまくんの気持ちを読み取り、音読しよう。 一斉音読後、がまくんの気持ちをを読み取る。 音読の個人練習をした後、ペア交流をする。	「ああ。」「とても いいお手紙だ。」の台詞に着目させ、その理由を考えることにより、「加え読み」につなげる。音読の工夫の仕方が分かるよう、「音読名人カード」を用いる。ペア交流の際、聞き手の児童にも視点をもたせるため、評価カードを用いる。
7	本時の課題を確認する。 読みかたをくふうして、はっぴょう会の れんしゅうをしよう。 班で練習後、ペア班で交流する。	「げき名人カード」をもとに、音読する部分と音読の工夫の仕方を個人で決める。机を後ろにまとめ、劇の練習や発表ができる場所を確保する。挿絵を用意し、場面全体の雰囲気がかめるようにする。
8 ・ 9 本時 ・ 10	本時の課題を確認する。 せりふやこうどうから 気持ちを考えて、「お手紙」のげきはっぴょうをしよう。 班練習後、ペア班で発表し合う。 担当班の発表を聞き、よさを発表する。	「げき名人カード」をもとに、音読する部分と音読の工夫の仕方を個人で決める。机を後ろにまとめ、劇の練習や発表ができる場所を確保する。背景として挿絵を用意しておき、がまくんやかえるくんの表情や動作などに浸れる環境をつくる。
11	本時の課題を確認する。 「ふたりは」シリーズの ほかのさくひんを 読もう。 シリーズの他の作品を読み、感想を交流する。	作品別グループに分かれて、疑問や感想を交流する。 「ふたりは」シリーズのうち、本単元で読んだ作品数を数えさせ、挙手で確認し、作品数が多い児童を価値付ける。

並行読書（「ふたりは」シリーズなど、アーノルド＝ローベルの作品）

1・2年合同集会：1年生に向けて、「お手紙」の音読劇発表会をする。

## 8 本時のねらい

「お手紙」の中の台詞や動きを表す表現に着目して、声の大小、速さ、間の取り方、表情や身振り、目線、姿勢などに気を付けて、読み取った気持ちが表れるように、簡単な劇を楽しむことができる。

## 9 本時の展開（9 / 11）

過程	主な学習活動	指導・援助
つかむ	<p>本時の場面（P9.L1～P13.L8）を音読する。 本時の課題を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>課題：せりふやこうどうから 気持ちを考えて、「お手紙」のげきはひょうをしよう。</p> </div> <p>自分のめあてを決める。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>Aさん：ぼくは「せりふから考える」なので、がまくんがあきあきしたようすが出るように、こえのちょうしをつよく音読しよう。</p> </div>	<p>劇の練習や発表ができる場所を確保できるように、机を後ろにまとめ、椅子は班ごとに所定の位置に置くよう、指示する。 教科書を手に持って、本時の担当場面を音読するよう、指示する。 「げき名人ひょう」を掲示して、めあてを決める参考にする。 表と同じ項目が書かれた「げき名人カード」を用いて発表させる。 めあての発表では、本時担当の班の児童を、意図的に指名する。</p>
考える	<p>班で場面音読練習をする。</p> <p>Aさん：「ぼく、もう まっているの、あきあきしたよ。」 （本文から表情・動作を付け足して音読する。）</p> <p>Bさん：「えー、きみが。本当かい。本当に、ぼくにお手紙を書いてくれたのかい。」 （本文の台詞に「加え読み」をして音読する。）</p> <p>自分のめあてをペア班同士で確認する。 ペア班交流をする。</p> <p>Aさん：「ぼく、もう まっているの、あきあきしたよ。」 （「あきあき」のところを、つまらなそうな表情で、語気を強めて音読する。）</p> <p>Bさん：「えー、きみが。本当かい。本当に、ぼくにお手紙を書いてくれたのかい。」 （本文の台詞の後に、驚いたことが伝わる台詞を付け足し、かえるくんを見ながら音読する。）</p> <p>Cさん：Aさんは、めあてどおり「あきあき」のせりふのところをつよく読んでいたのでよい。</p>	<p>必要に応じて第2次の読み取りプリントを見直すように助言する。 背景として挿絵を用意しておき、がまくんのすねたりあきらめたりしている感じや、かえるくんの一生懸命説得したり今か今かと手紙を待ったりする感じに浸れる環境をつくる。 Gさんが集中できるように、班の仲間が声をかけ、椅子に座って劇練習を見るように働きかける。劇の中で、自分の出番を間違えずにできたら、教師と班の仲間が認める場をつくり、価値付ける。 互いの交流の妨げにならないように、ペア班ごとに場所を指定する。</p>
深める	<p>モデル班の発表を聞く。</p> <p>Dさん：「ぼく、もう 家へ帰らなくっちゃ、がまくん。しなくちゃいけないことがあるんだ。」 （言いながら中腰になるなど、今にも走り出しそうな様子をしている。）</p> <p>担当班による音読劇の発表を聞く。</p> <p>Aさん：「ぼく、もう まっているの、あきあきしたよ。」</p> <p>Bさん：「えー、きみが。本当かい。本当に、ぼくにお手紙を書いてくれたのかい。」</p> <p>よかったところを発表する。</p>	<p>音読の工夫に加え、身振りがうまく音読の雰囲気と合っていた児童を価値付けることで、後の担当班の音読劇発表のモデルとする。 音読劇を見ている児童は、担当班の児童氏名とげき名人の項目が書かれた「ひょうかカード」を持ち、発表前に個人のめあてを言う際に印を付けさせ、相互評価の際に活用させる。 「かんそうの言い方 ーらんひょう」を掲示し、感想発表のモデルとする。</p>
まとめる	<p>自分のめあてについて振り返る。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>Aさん：ぼくは「あきあき」のせりふをつよく音読できた。Dさんはせりふを言いながら体もうごかしていたので、こんどはぼくもやってみよう。</p> </div>	<p>授業の導入で決めた自分のめあてについて、挙手をして振り返る。</p>